

「——それにしても、一体何の風の吹き回しですか？」

「んー？ 何が？」

鬱蒼と生い茂った竹の葉が空を覆っているせいで、竹林の底からでは墨を刷いたような夜空を満目に望むことはできない。それに加えて、今宵の空には霞のような薄い雲がちらほらと浮いているから、夜に燦然と瞬いているはずの星の光も、いつもより疎らだった。

「何がって、まさか妹紅の方からこんな風に何かに誘ってくれるなんて……もしかして、明日は槍でも降ったりするんだらうか？」

「慧音、それちよつと私に対して失礼じゃないか？」

暗闇に包まれた竹林は一層薄気味悪く、どこか淀んだ空気を孕んでいる。夏が終わっているのにどこかむしむしと蒸し暑く、冬が始まっていないのにどこか薄ら寒い。そんな相反する空気を混濁している竹林は、なるほど確かにいつしか迷ってしまうには十分過ぎる程の雰囲気醸し出していた。

「私もたまに一人で夜回りをしていますし、貴女がよく夜警していることも知っています。だけど、二人でこうして

夜回りすることは今まで無かった。だから、」

「だから？」

「——ちよつとだけ、嬉しいんです」

「……そうか。喜んでもらえただけでも僥倖、誘った甲斐があつたよ」

そうしてまた、二人で肩を並べて竹林を歩み出す。

別にそういつた規則も義務も無いけれど、慧音はこうして定期的<sup>レギュラー</sup>に里周辺の夜警を行っていた。何か里に異変は無いか、里の周辺で誰かが妖怪に襲われていないか——里の人間達との交流や情報交換も兼ねて、仕事も私事も用事も何も無い手持ち無沙汰の夜は、いつもカンテラ片手に里の周辺を見回っていた。

しかし、同じように妹紅も夜警をしているということを知ったのは、実はごく最近のことだった。

不健康すら許されるその体で、誰にも憚ることなく丑三つ時を散策し、索々と風が気味悪く鳴く竹林の中でも飄々と探索し、夜が降りた蕭索とした竹林の中を隈なく詮索する。——慧音がこの幻想の地に流れてくる遥か前から、誰にも褒められることのないその孤独な夜警は続いていたらしい。

当の本人はというと、頭の後ろで手を組みながら、素知らぬ顔で草を踏み分けている。